明治・大正・昭和 敦賀浄曲界

小林　敏

はじめに

北国に位置する福井県は長い海岸線と山地をようして、豊富な海陸の産物に恵まれた地域である。

なかでも海路は古くから発達し、物資の入出荷を扱う三国・敦賀・小浜の各港は繁栄した。多くの船荷を扱う業者や問屋、売買する商人など、人の集まる町には自ずと宿屋、娯楽、芸能などが発展した。

敦賀でも船頭衆などの船乗りや、商人などの遊び場として遊郭などが賑わって、ここで働く芸妓さんの習う芸事の一つに義太夫節（浄瑠璃）があった。

浄瑠璃は庶民の人気を得て全国的に広まって、花柳界に勤める芸妓さんが習う必須の芸事であった。

また、歌舞伎や浄瑠璃には福井県の旧国名である越前・若狭国の地名を題材にした作品も見かけられて、越前出身といわれる近松門左衛門の作品には『傾城佛の原』、『敦賀の津三階蔵』、『傾城反魂香』など、これまでによく知られた作品がある。

『三階蔵』には

金がさき平太夫

北国屋傳左衛門

の役名と、「あほう三五郎」の役で金子吉左衛門も出演し、さらに『傾城富士見の里』には敦賀屋善次なる役名も登場している。

近松が京・万太夫座へ入座した頃には、道化役として作者でもある先輩の金子吉左衛門に、近松の本名である杉森信盛から「信盛、信盛」と呼ばれて使いもしていた。

近松と金子の合作に『龍女淵』があり、金子の作品には『代々女夫鶴の孫』などがある。近松も歌舞伎・浄瑠璃作者として大成し、後世に残る名作を世に送り出したが、入座した頃には並々ならぬ苦労があった。

他の作者による作品には

『陰陽蔵和合の中富』には

疋田小文次　ほそろぎ十内

疋田定右衛門　氣比の社へ日参の場

『ごひいき勧進帳』

氣比明神の場

『彌陀本願三信記』

親鸞上人御傳記

越前三国　汐待のだん

蓮如上人御傳記

嫁おどし谷のだん

肉付面のだん

など、この他にも福井県の地名や伝承を題材にした作品も今日に伝えられている。

敦賀遊郭も江戸時代から軍記物、大衆向け読み物、遊里の案内書などによって、その賑わいぶりが紹介されている。

明治期

幕末から明治維新期には政府軍と旧幕府軍による戊辰戦争によって、若狭小浜藩でも政府軍の一員として北越戦争に従軍して、各地

を転戦した。

敦賀でも政府軍が一時的に駐屯し、騒然とした世上では芸事を嗜むことが出来得る状況ではなかった。

この頃の芸界を知る資料や口伝は皆無であるが、僅かに芸妓さんの温習会では義太夫の人形振りや芸居が行われていた。

明治二十年（一八八七）十月十四日から十九日まで、大阪から伊達、富、折の三太夫を招請して公演が催されたが、会場や番組などは不詳である。

また、三太夫の芸姓は詳らかではないが、おそらくは竹本姓であろう。

三太夫を招いたのは敦賀素義連（素人義太夫）で、会員の技芸向上を意図したもので、中でも伊達太夫は七十歳の高齢ながら敦賀では馴染みも多く、連日の大入りであった。

滞在中の諸費用は素義連が負担し、収入の大部分は太夫に贈られた。大阪の太夫を招請したことからも、敦賀では師匠の主宰する団体が活動していたことが知られる。

芸妓さんの舞浚いや芸居が明治二十一年（一八八八）十一月十七日から三日間、開催されて芸妓さんが人力車に乗って町中を引き回しての宣伝が行われた。

会場などは明らかでないが、演目に太閤記、朝顔日記、三代記など、舞や義太夫が演じられた。

この頃の敦賀浄曲界を知る手掛かりは少ないが、僅かに明治三十三年（一九〇〇）四月二十七日に行われた大会があった。

この大会は鶴澤時四師（時蔵、寿造）の主宰する「鶴時会（つるときかい）」とも考えられるが定かではなく、会場も料亭または民家の大広間を借りて開催したのであろう。

三絃　鶴澤時四
太夫　竹本越竹
床番　徳　松

そして太夫と三味線の熱演ぶりが見られるように、床を一段と高くして観客の便に供して、当時の演奏形態が珍しい。また肩衣、袴などの衣装や見台と飾り房は立派で、この頃の盛況ぶりがうかがえる。

太夫の越竹軒は、この写真が初見であるが、滋賀県長浜市宮前町　長浜八幡宮・絵馬堂に浄瑠璃額が二面奉納されており、その内の一面が

明治四十一年一月
改名披露浄瑠璃大会
寿改五代目豊竹巴勢太夫

である。この大会で越竹軒は

お染久松　野崎村　竹本越竹軒

を語っている。この他に敦賀からの太夫・三味線の出演は見られない。

この浄瑠璃額には当時の長浜浄曲界の全容

を知る程の錚々たる顔ぶれで、太夫欄には竹本三桝太夫、豊竹常盤太夫、同　美玉太夫の名が見えている。

竹本三桝太夫は彦根の人、常盤太夫は声量の豊かな太夫で、美玉太夫は坂田郡山東町小田（現米原市小田）の人である。

常盤、美玉の両太夫は、戦後も長浜曳山祭りの祭礼では子供歌舞伎の太夫（浄瑠璃）を勤めている。

また、三味線では鶴澤玉造師は目の不自由な三味線奏者であり、鶴澤佐傳師は坂田郡山東町間田（現米原市間田）の人で、曳山祭りでは月宮殿（田町組）の三味線を勤めている。

この奉納額で最も特筆すべきは

後見　鶴澤豊三郎

の名が見えていることである。豊三郎師は

四代目
鶴澤傳吉 ― 鶴澤豊三郎

四代目鶴澤傳吉師（定治郎、豊吉）の門下であり、元治元年頃から、大坂の天満戎門芝居の番付に豊三郎師の名が見られ、慶応元年にも出演している。　（『義太夫年表　近世篇』）

小林　明治・大正・昭和　敦賀浄曲界

明治二年二月　天満戎門ニテ
薫樹累物語
嫗山姥

三味線　鶴澤豊三郎
（『義太夫年表　明治篇』）

として番付の三味線欄に名がある。

豊三郎師は幕末頃に京坂の舞台で活躍された豊竹三光斉の家系につながるとも伝えられ、立派な体格の人で、後には生国の長浜に戻られた。

豊三郎師は越竹軒をはじめ長浜の師匠連にも指導されて、長浜浄曲界の重鎮であった。

その影響力は大きく敦賀へも指導に訪れて、長浜・敦賀は豊三郎師の影響から、後には交流も盛んに行われるようになった。

豊三郎師には三人の女子がおり、三女の鶴澤栄糸さんは大坂で修業され、後年には敦賀・武生（現越前市）へもたびたび訪れている。長浜の自宅前には

長浜文楽会
長浜義太夫研究教室

の看板も掲げられ、後に武生・総社大神宮の社務所で営まれた鶴澤時四師の追善浄瑠璃会にも出席されている。

敦賀の義太夫愛好者によって結成された「語遊会」は明治四十年（一九〇七）十二月二十四日、納会を福田伊八氏方で催された。

語り物は壺坂、百度平、本蔵別荘、朝顔日記、松王丸、野崎村などで、盛会に行われた。会場となった福田氏は天満町（現港町）で浦汐期徳・敦賀間の貿易業に携わっていた。

敦賀港天満
貿易商　福田伊八
浦汐期徳港
一柳洋行
敦賀代理店
（明治四十四年一月一日　福井新聞）

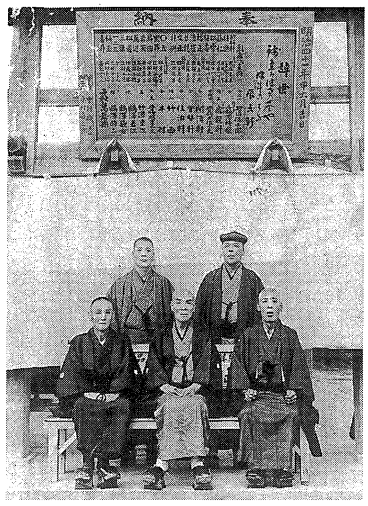
敦賀浄曲界の団体として、ここに初めて「語遊会」という名称が出てきたが、いつ結成されて目的、会則、役員などの詳細は明らかではない。この年には納会が開催されていることから、これ以前には語遊会は発足して

いたのであろう。

しかし、これまで語遊会としての大会の有無は不詳で、各師匠の主宰する団体は随時、発表会を行っていたと推察されるが伝えられていない。

翌年には敦賀浄曲界の発展に寄与された辰玉軒の傘寿を祝して明治四十一年（一九〇八）六月、敦賀義太夫の好義連が相寄って大会を開催した。

会場や当日の番組などは明らかでないが、大会後に浄瑠璃額を氣比神宮に奉納した。



竹西常次郎　扇谷己之助
和田孫左衛門　増田傳四郎
岡村　利七

この浄瑠璃額には出演した素義連の名も記されているが、特に目立つのは敦賀芸妓の名が多いことで、職業柄、芸事の一つとして浄瑠璃を習っていた。

明治四十一年申六月吉日

奉納

辞世
銭金は浮世の塵や
はすのはな
八十歳
辰玉軒

乱表次第不同

越竹軒　語樂　嶋仁　松雪　梅壽　福正　清雀　若龍　文正　花與
土佐連　武長すゑ　むさしやつた子　藤村いと　藤君小てる　出口八重　松林いと　住里連　菊屋小来　藤村さく　寿し清きぬ　鶴時連　稲上龍吉　辻村廣子
全三味線連　松月〆子　辻村小福　中脇春子　井上房子　木勘政子　辻村小歌　増光小米　辻村小花　小とら□ゆきぎ　元村　岡村春駒　寿し□せが小さん
発起人　増田傳四郎
全　時四事　鶴澤時藏
八百新伴　施主　扇龍軒
世話方　豊竹土佐太夫
全　関清軒
全　登勢軒
全　住治軒
補助竹　西
全　木村

○五里昇　昇由　岩笑　萬遊　松道　三原　全　一二三　仙玉　喜昇
太夫　豊竹越重太夫　三　竹澤里江　鶴澤君江　鶴澤幾女　線　鶴澤時二

千秋萬歳樂

筆者　中村磯吉
細工人　木村喜三郎

関清軒は関磯太夫（竹本磯太夫）であり、登勢軒は川村登勢翁で、若狭町気山の人ではなかろうか。

○藤村いと子

おいとさんは大阪の生まれ。「藤村」に勤めて、かわいらしい感じの人で、長唄の三味線を弾かせては遊郭随一といわれる程の腕前で、若い芸妓さんも多く習っていた。大正三年三月の「一世一代豊竹土佐太夫」の三味線欄にも名がある。

○寿し清きぬ

辻村君勇さんの姉芸妓で、結婚して一時期は浦汐期徳に渡った。帰国して大阪の料亭に勤めた。

都々逸

花や紅葉と気を揉む内に
灰に池田のさくら炭

寿司清きぬ

○菊屋小来

やや細身ながらも背が高く、上品できれいな芸妓さん。後に医師と結婚されて滋賀

県に移った。

○辻村小花

当時の芸妓さんの中では踊りは一番で、また琴も良くして上品な方であった。浦汐と敦賀間に就航していた鳳山丸の船員と結婚して、大島区（現相生町）で世帯をもっていた。

○出口八重

東京生まれで「出口」に勤め芸妓となった。おとなしい方で、江戸っ子の歯ぎれのよい話し方で人気があった。

ご主人は町内会の役員として、敦賀空襲の際には消火、避難誘導などに尽力された。

○稲上龍吉

龍吉さんは滋賀県の出身。明治四十一年では二十三歳。京都・宮川町でも勤めて、やや小柄ながらも愛嬌がよいことから、ひいき客も多かった。

敦賀では初め「稲上」に勤め「金井」へと移ったが、当時は貿易で華やかな浦汐期徳へ渡った。同地の「金時亭」に勤めたが、後には再び「稲上」へ戻った。

ロシア領・浦汐期徳港と敦賀港との貿易が盛んで、多くの邦人が浦汐に住み、大阪や敦賀の芸妓さんも渡航申請して、彼の地に渡って勤めていた。

当時の浦汐市の料亭には金時亭の他に「常盤亭」、「松玉」、「かいこ」、「千鳥」、「鶴城館」などがあって賑わっていた。

また、義太夫愛好者が結成した「烏粋会（うすいかい）」もあり、日本軍艦が浦汐港に入港すると慰問も行っていた。

金ヶ崎町・金崎宮の玉垣にも「金時亭春吉」の名が見られて、浦汐市の盛況ぶりを今にとどめている。

なお、辰玉軒の傘寿を祝しての浄瑠璃額は氣比神宮へ奉納されたが、今日では見ることが出来ない。辰玉軒の本名などは詳らかでないが、「一世一代豊竹土佐太夫」では高齢ながらも

日吉丸　三段目　　辰　玉

糸　種子

を語っている。

敦賀好義連によって結成された語遊会は、明治四十年以前には結成されていたが、発表会などの具体的な運営は進んでいなかった。

ようやく明治四十三年（一九一〇）十月から会費を徴収して、毎年、春秋二回の大会を開催することを決めた。

会費の徴収等によって、語遊会の運営も軌道に乗ってきたのであろう明治四十三年十一月二十三、二十四の両日、笹谷座に於て待望

ツレ　鶴澤時二
糸　鶴澤時蔵
太夫　語楽

の語遊会第一回の発表会を開催した。

しかし、これ以外の番付は残されておらず、出演者の熱演ぶりや、観客の様子などは残念ながら伝えられていない。

「近頃河原達引（ちかごろかわらのたてひき）　猿廻しの段」の三味線は鶴澤時蔵が勤めているが、芸名を鶴澤時四、時蔵、寿造と改名して、大正期には寿造と称していた。

連弾きの鶴澤時二は時蔵師の子息で、後には父の初名である「鶴澤時四」の名跡を襲名して、終生をこの芸名で通した。

太夫の語楽は後に「一世一代豊竹土佐太夫」にも出演している。

そして、語遊会の第一回大会が無事終了後に、全員揃っての記念撮影が行われた。

この記念写真には若き頃の植山鱗太夫、近清料理店主、鶴澤時二、豊竹土佐太夫、竹本越竹軒、鶴澤時蔵、そして芸妓さんも揃い、十代になったばかりの後の〆吉さんも愛らしい姿を見せている。

○辻村小歌

当時の「辻村」は芸事の出来ない芸妓さんはいない程、芸達者が揃って、小歌さんも一通りの芸事が出来る達者な方であった。後には銀行員と結婚された。

○竹森小さん

はじめ新町に、後には森屋敷（現栄新町）へと移り、置屋を始めて芸妓さん数人を抱えていた。

小さんさんは、お客を退屈させないほど座もち（座敷持ち）が上手な方で、後には旅館を経営している。

○藤君てる

きみ、てる、ふみさんは三姉妹。きみ

「藤村」に勤め、後に藤村の藤と名前のきみから「藤君」と名付けて、六軒町（現栄新町）に店を開いた。

てる

気立てのやさしい人。

ふみ

藤君清次さんは美人で踊りの上手な人。洋食店の子息に嫁いだが、後には大阪でも勤めた。次に神戸へ移って、縁あって彼の地で嫁いだようだ。

語遊会第一回の翌年に語遊会の一部が「楽之会」という一小団を結び、明治四十四年（一九一一）七月二十三、二十四の両日、夜六時より都座で浄曲会を開催した。

初日　　二日目

日吉　三　三木　寺子屋　土松
弁慶上使　古蝶　さ可ろ　貴声
太　十　辰調　阿波鳴門　虎雪
蹠の滝　千歳　壺坂　三島
日露戦争　梅原　鱗　お俊伝兵衛　堀川　清雀
宗五郎内　梅寿　松王下屋敷　喜昇
野　崎　越竹　酒　屋　土佐太夫
三味線　鶴澤時蔵　同　時二　豊澤竹鳳

この両日の番組のうち、二日目に出演している太夫への芸評があり珍しい。

（句読点、送り仮名を付して適宜、新字体、新仮名遣いに改めた。また、外題も一部変更になっている。）

○三島丈の壺坂（糸　時二）。本日も鈍太郎、参着遅延のため初めを聞き漏らしたが、総体に於て稽古の進歩、確かに表れて聞き応えしだ。

マダく前途遼遠だから、せっかくと稽古が肝要。

○清雀丈の加賀見山（糸　時蔵）。一座中の当たり男。それに生来の美声、舞台に表れて、語らぬ先から非常な人気で、コレは聞きものだろうと座り直して謹聴に及んだ。

非難の点は無かったが、どうした過去の因縁やら、同丈として総体に引き立たぬ感があった。あるいは余り手に入り過ぎて、軽くやろうと苦心して出来損じたのだろう。

全く今が進歩の分水嶺に達しているのだから、逆戻りせぬように語遊会のため、お頼みする。

○喜昇丈の百度平（糸　竹鳳）。例の花火線香式に角張った顔を振りまわすは、チト癪に障るが、初めより中、中より切と段々に語り栄えさす腕前、否、喉の穴は幅もあって面白かった。

○土佐太夫の三勝半七（糸　時蔵）。文楽の何々太夫といわれた太夫でさえ、とても古人の形はやれませぬと、宗岸の咳払いだけは省くのに、遠慮せずにやってのけた豪胆さ。

アッと魂げて拝聴していると、書き置きの読み方にもチト文句を並べたい気がする。それに軽く流れるよりは却って良いか知らぬが、総対に対し同丈はチト固くなる癖があって、聴客はさぞ肩が凝ることであろう。

しかし、さすがは太夫号のあるだけ、五、六人の聴客をしくく泣かした手練は、確かにお手際であった。

（鈍太郎）

（明治四十四年七月二十六日　敦賀新聞）

この番組では喜昇丈の「百度平」を竹本越竹軒の豊澤竹鳳が三味線を勤め、「三勝半七」の豊竹土佐太夫の糸は、いつも乍ら鶴澤時蔵（時四、寿造）が弾いている。

また、明治四十四年（一九一一）の夏、語遊会では笹谷座、都座の割り引きが受けられる記章を作成し、会員の利便を図った。

この頃、境（現栄新町）に敦賀唯一の寄席を建設する計画のあることが明治四十五年（一九一二）一月、明らかになった。

建築主は竹本越竹軒の子息である徳治郎氏で、建物は六間に十間ということで、土地の所有者と近く交渉に入るという。

しかし、席開き後は席名、席主もたびたび代わったが、昭和二十年（一九四五）七月の空襲で被災するまで続けられた。

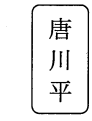
なお、明治から大正期にかけて素義が所持していたと思われる浄瑠璃本を、敦賀市立図書館では三十五冊ほど所蔵されている。

その内訳は丸本（正本）が七冊、他は床本で、丸本・床本には素義が所持していたと思われる芸名が書き入れられている。

この他にも歌舞伎関係と見られる芸名も書き入れられ、これは滋賀県長浜市の曳山祭りの子供歌舞伎の振付師の名であるかは未詳である。

床本の中には鶴澤時四師の写本もあって、これには署名、花押のある「仮名手本忠臣蔵」も含まれている。書き入れられている主な芸名は

松竹梅　鶴　金　馬　吉
木　芳　登勢軒　白　茶
一　丸　関　清　力　正
東　雄　鶴澤勝造　竹本万玉
鶴澤時四　豊竹杏太夫　竹本磯太夫
豊竹重徳斉　豊竹大意翁



中村北若　市川亀吉　市川百蔵
岩井粂三　中山田之助

これらの丸本と床本は、いつ頃、どのようにして町立図書館（現敦賀市立図書館）へ寄贈されたかは、今日では明らかではない。

しかし、明治以降の敦賀素義連と師匠の芸名、そして朱筆で譜章も書き入れられて、いずれも貴重な浄瑠璃資料となっている。

大正期

明治・大正期の師匠として鶴澤寿造（時四、時蔵）と、豊竹土佐太夫の両師匠が挙げられる。

その一人である土佐太夫の「一世一代豊竹土佐太夫」の浄瑠璃大会が大正三年三月、開催された。

この大会は、土佐太夫の還暦を迎えられた節目としての退隠浄瑠璃大会であろう。会場などは明らかではないが、大会後に奉納された浄瑠璃額が氣比神宮・絵馬堂に残されて、今日では墨跡も薄くなって判読が難しい箇所が多くなっている。

土佐太夫は長い歳月にわたり敦賀浄曲界の指導者として、多くの門弟を育成された功績は大きい。

また、この大会が語遊会の主催によるものか、あるいは土佐門下と有志の発意によって催されたかは定かではないが、この時代の素義と芸妓さんを知り得る貴重の資料である。

この「一世一代」の番組では多くの芸妓さんも出演して、三味線欄に名を連ね、大切の「伊勢音頭」の芝居では人形振りで役割を演じている。

○松林亭〆太郎

美人芸妓さんとして有名で、芝居や踊りの師匠として若い芸妓にも教えていた。

奉　納

初日番組

御所桜三段目　□徳　糸種子
日吉丸三段目　辰玉　糸種子
太功記十段目　常盤　糸若吉
加賀見山　又助内　金雀　糸時二
三十三所　壺坂寺　太良　糸米子
百度平住家　小□　糸筆助　呼カ
朝顔宿屋　三若　糸筆助
菅原四段目　三原　糸種子
白石噺七　若吉　糸筆助
忠臣蔵九　土佐太夫　糸寿造

中入

日露戦争　梅原内　鱗　糸時二
お半長右衛門　帯屋　梅壽　糸筆助
佐倉宗五郎　子別之段　越竹　糸寿造

大切伊勢おんど油屋之段
両日浄瑠璃身振狂言
福岡貢　菊屋　千代
おこん　出口　八重
徳島岩治　安善　種子
お志か　□　□
料理人喜助　立石　駒七
仲居万野　橋場ぼん太
はやし連中　馬路　米子
土井川初栄

千秋萬歲樂

一世一代　豊竹土佐太夫

二日目番組

廿四孝四段目　新昇　糸筆助
玉藻前三段目　由昇　糸種子
日吉丸三段目　土久　糸千代
御所桜三段目　土□　呼カ
三勝半七酒屋　種子　糸八重子
垣生村　花輿　糸時二
彦山毛谷村　辰□　糸種子　鬼カ
百度平住家　筆助　糸傳吉
いざり瀧之段　登勢翁　糸時二
紙治こたつ　土佐太夫　糸寿造

中入

一の谷陣屋　松竹□　梅カ
本蔵下屋敷　傳吉　糸若吉　傳吉カ
お駒才三　白木屋　磯太夫　糸寿造

三味線連名

中上　小花
三桝　末長
吉壽小だるま
安鶴ちん　六
すし清ゝ丸
松林亭〆太郎
増よし　住子
〃　茶良子
中鶴　花子
立石　駒七
藤君てる子
藤村　かつ子
〃　糸子
増よし　米子
〃　太良
菊屋　千代
小島　ゆき子
安善　種子
鶴澤筆助
鶴澤若吉
鶴澤傳吉
世川村登勢
関磯太夫
話岡村寿造
宇野清雀
坂野梅寿
□鳥　米カ

客　土松萬玉
古蝶山鳥
昇若清雀
座　土鶴島仁
乱　一京一二三
表

三味線
鶴澤壽造
鶴澤時二

床番
綿源

大正三年三月

また、都座の「こけら落とし」では、他の芸妓さんと「白波五人男」を披露した。

○三桝末長

ふっくらとした面立ちで、かわいい感じの人。最初は「住円」に、後に「三桝」に移った。同店に三桝玉之助あり。

○小島ゆき子

「小島」の実娘。おとなしい方で、芝居も良くした。

都々逸

来るかくと炭つきたして
仇に立つ火に怨み言

小島ゆき子

○藤村かつ子

松井さんは敦賀の人。二十歳頃に縁あって大阪へ嫁いだが、主人に先立たれ敦賀に戻った。

「藤村」に勤めていた頃は同店一番の売れっ妓で、笛を奏でては相当な腕前であった。昭和五十七年七月には九十四歳の高齢ながら健在。

○尾張屋若吉

新町のお茶屋「尾張屋」で太芸妓（浄瑠璃

や太棹三味線を弾ける芸妓さん）として勤めていた。他に「仲吉」勤めの筆助さんも太芸妓さん。

○増よし茶良子

しな、茶良子、種次は三姉妹。種次さんは安善種次で、後には「安善」の女将。

○安善種子

安善種次さんの妹芸妓で、岐阜生まれ。同地でも勤めていたが、後に「安善」に勤めるようになった。

とくに浄瑠璃や芝居が上手で、若い芸妓さんにも教えていた。

○安鶴ちん六

ちん六さんは美人として知られて、後に東京へ移り芸妓として勤めていたが、病によって同地で亡くなられたようだ。

「安善」に勤めていた頃は、芝居はあまり上手ではなく、覚えるのも少し遅いようで、芸妓芝居の練習では注意されていたようだ。

○橋場ぽん太

お茶屋経営をしていたが、後には九州博多に移った。再び敦賀に戻り「橋場」に勤めるようになった。芝居や踊りをこなす器用な方であった。

都々逸

主をまつよの炭火は消えて
憎やきこゆる雞の声

橋場ぽん太

○菊屋千代

おイトさんは川崎家に入り、はじめ「住円」に勤めて、後には「菊屋」、「木勘」へと移った。愛らしい感じの芸妓さん。

○中上小花

後に貿易関係の人と結婚された。また、同店の中上愛之助さんは鳥取の出で、曙町に住み後には浄瑠璃を教えていた。

愛之助さんの妹で、美人として知られた「かつ若」さんは、お茶屋「かしく」に勤めていたが、若くして亡くなられた。

明治後期に結成された団体である「語遊会」は、

大正五年四月六、七日
於　笹谷座
第三回大会開催

大正五年十一月十二、十三日
於　笹谷座
秋季大浚会開催
（第四回大会か）

大正六年四月二十四、二十五日
於　笹谷座
第五回大会開催

この第五回の大会をもって以後、語遊会としての大会が開催されたかは伝えられていない。

そして、この後も語遊会の組織が継続して運営されたかは明らかではない。敦賀浄曲界最大の団体である語遊会の消息は、この第五回大会の後は開催されていないようである。

娘義太夫（女流義太夫）は江戸時代から庶民に人気があり、明治に入った中頃からは竹本京枝、竹本東玉を輩出し、さらに竹本小土佐、竹本素行、初代竹本綾之助に人気が集まった。続いて竹本朝重、豊竹呂昇の女義が人気を博した。

中でも初代竹本綾之助は美貌と技量を兼ね備えて抜群の人気を誇り、続いて豊竹呂昇にも人気が集まった。

さらには贔屓の女義を積極的に応援する堂

摺連（すれん）も現れて、出演する会場はいつも賑わった。

その美人女義として人気の高かった豊竹呂昇一行が大正六年（一九一七）七月八日から三日間、笹谷座で敦賀初公演を開催した。

敦賀での公演は初めてであり、熱狂的に迎えられたと思われるが、その賑わいぶりや番付などは残念ながら残されていない。

ここに前年の大正五年（一九一六）六月二十五、二十六日、福井市の昇平座で公演された二日目の番付がある。

二日目

玉藻前　三段目　昇女
由良港　金女
八　陣　八ツ目　昇六
梅野由兵衛　都女
日吉丸　三段目　呂勇
阿波鳴戸　八ツ目　雛女
菅原寺小屋　喜昇
お半長右衛門　帯屋　東廣
千代萩　呂昇

この番付では「お半長右衛門」を語っている竹本東廣は、美人で技量のある女義として人気を集めた一人であった。

豊竹呂昇一行に負けじと大正八年（一九一九）十一月三、四日、武生町（現越前市）の武生座で「鶴時会」主催の秋季浄瑠璃大会が開催された。

「鶴時会」を主宰する鶴澤寿造師は、大正の初め頃に居を敦賀から武生町に移されて活動していた。

初日、二日目ともに番付は残されており、武生芸妓連をはじめ、三国町（現坂井市三国町）の芸妓さんも出演している。

敦賀からは豊竹土佐太夫が招かれて、

初日

時雨　炬燵内の段　土佐太夫
糸　時四

二日目

菅原　四段目　土佐太夫
糸　時四

を語っている。

土佐太夫の糸は鶴澤時四が勤めているが、これは鶴澤寿造師の子息である久太郎氏であろう。父の利七氏は、この頃には鶴澤寿造の名であり、寿造師の初名である「時四」の尊名を久太郎氏が襲名していた。

また、この番付の三味線に「鶴澤時二」の名が見られるが、これは父・利七氏の三男である正蔵氏が、兄・久太郎氏の名であった「鶴澤時二」の名跡を受け継いだのであろう。

この大会を主催した鶴時会は父・利七氏が主宰しているが、この頃には久太郎氏が引き継いでいたかは未詳である。

子息の久太郎氏は

武生町幸
三味線商　岡村久太郎
（大正九年九月二十二日　武生中外新聞）

このように大正九年に広告を出しているが、大正十二年（一九二三）九月の関東大震災の時には、敦賀町でも義捐金を募っており、この中に

境区　岡村久太郎

とある。あるいは武生町に移った後も、敦賀町には支店または出張所的な営業店を置き、家業を続けていたのであろう。

また、江戸時代から長い間にわたり町民に馴染みの深かった笹谷座（笹屋座）が、建物も新築されて大正九年（一九二〇）二月八日、「小屋開き（こけら落とし）」が行われ、座名も「敦賀座」と改称して再出発する運びとなった。この建物が昭和二十年（一九四五）七月、敦賀空襲で焼失するまで続けられた。

三味線奏者であり師匠としても活躍された鶴澤寿造師が大正十年（一九二一）三月二日、その功績を惜しまれながら生涯を終えられた。

寿造師は京都の生まれ。いつ頃から敦賀に住まわれたかは定かではなく、森屋敷町（境区　現栄新町）で三味線の修理販売店を営んでいた。家業の傍ら昼は芸妓さんに三味線を、夜は浄瑠璃を教えていた。

寿造師の師系については知る手掛かりは少ないが、幕末頃の文楽に鶴澤時蔵がおり、この人の師系に繋がるかは明らかではない。

後に寿造師は「鶴時会」を主宰し、多くの門弟の指導育成に努めた。

また、寿造師は長い間にわたり、豊竹土佐太夫の相三味線を務め、互いの気心と呼吸を知り、舞台では支え合って歩んだ浄瑠璃一筋の師匠であった。

その寿造師を失った土佐太夫の心情は幾許りかと察せられる。そして寿造師の跡は子息の鶴澤時四師が、家業と鶴時会を受け継ぐことになった。

鶴澤寿造、豊竹土佐太夫の両師と共に、敦賀浄曲界の発展に導いた竹西越竹軒の一世一代浄瑠璃大会が大正十一年（一九二二）二月、滋賀県長浜町（現長浜市）で開催されて、この時の浄瑠璃額が長浜町八幡宮・絵馬堂に奉納された。

（先年、絵馬堂の老朽化、奉納額（墨跡）の劣化等によって、解体撤去および廃棄された。）

会場や番付などは詳らかではないが、この大会に敦賀から鶴澤寿造師はすでに前年に亡くなられて、子息の久太郎氏が二代目鶴澤時四を、三男・正蔵氏が鶴澤時二と、それぞれ名跡を襲名して出演している。

さらに坂野梅寿、豊竹土佐太夫師も高齢ながらも出演している。

この奉納額における土佐太夫の位置は、因会の太夫欄にあり、全体が草書で記されている中で、土佐太夫名は楷書体のやや太字で行間もあって、長年の功労と技量から格の上位にあることを示している。

また、この大会には長浜および、その近郊からも出演している。

○かほる

滋賀県東浅井郡びわ町南富田（現長浜市富田町）。自転車店経営。富田地区の「冨田（とんだ）人形浄瑠璃」は、江戸時代から伝えられている浄瑠璃芝居である。

この地域は人形浄瑠璃が盛んで、戦後も大阪の文楽から太夫や人形遣いの指導を受けて、古くから伝えられている郷土芸能を受け継いでいる。

○文室梅調

伊香郡木之本町（現長浜市木之本町）の人で、声量のある太夫。

○岩崎文楽

昭和二十二年（一九四七）六月八日より三日間、京都・祇園八阪倶楽部で開催された

竹西越竹軒一世一代浄瑠璃大會

出演者　三味線　次第不同

聲友會
□松　ヒ文樂
コ梅玉
ネ秋月

因會
鶴澤玉造
鶴澤保造
野沢浪吉
鶴澤佐傳

川崎壽巴
上野みゆき
大木湖月
前川翁

素カ□會
□枝

ヒ寸馬
コ一婦
ネじ

木葉カ□會

佐善
傳小鳥
連○登

ヒ野澤吉吾
コ花澤てつ
ネ花澤□之助
豊澤新糸

二代目鶴澤時四
鶴澤時二

世
大木湖月
前川翁
清水まこと
林岡呂聲
宮川斗大
澤井可勝
清水里キ司
小竹□阿ヅま

話

巴會
英

巴
三光
義聲
連登旭

越竹連
豊澤米駒
鶴澤玉助

方
森かつら
高野鯉勢
川崎一三五
那須松翠
林一聲

ダンカ
ト
かほる
丁□

越竹改
□八十八
□玉の助
豊澤竹鳳

補
筒井三朝
川村一都
今西一葉
文室梅調

カルツ
梅壽

取締
豊竹須磨太夫
四ッ居伊三郎

助
堀青松
山本壽
森貴遊

因會
豊竹巴勢太夫
豊竹葉伎太夫
竹本錦枝太夫
竹本琵琶太夫
竹本壽太夫
竹本吾樂斉
ツルガ
豊竹土佐太夫

補助員中
門弟中

辞世
會主
越竹軒

大正十一年二月
千秋萬歳樂

「第十回　平安素人浄曲会」に出演して

長浜　岩崎
土　橋　文楽

を語って入賞した。この大会には敦賀からも東條　司氏が出演して

敦賀　東條
志度寺　司

で入賞を果たした。

○四ッ居伊三郎
素人義太夫

○鶴澤保造
曳山の高砂山（宮町組）専属の三味線弾き。

○野沢浪吉（女性）
曳山・高砂山（宮町組）の豊竹巴勢太夫と後に結婚。

○豊澤新糸
三味線の音色は絶品。大阪文楽を退座して彦根に住む。

○野澤吉吾
月宮殿（田町組）の三味線奏者。

○豊竹巴勢太夫
佐官屋。

この頃の敦賀遊郭には他県からの芸人が「ホーカイ節唄」や、女流の「新内流し」が遊郭界隈を流し歩く姿も見かけられた。

昭和期

「四季の敦賀」

〜それ、敦賀の港は海ふかく、岸壁堂々新たに築いて、ひろき誇りを満蒙や、出船入船東洋に、ここ北陸の繁昌は、げにも名におふ国際都市、いざや名所をめぐらん。

（土岐善麿『松の葉帖』）

これは土岐氏が「四季の敦賀」と題して作られた長唄で、その冒頭の一節である。

明治期に開港指定となり以来、国際貿易港として栄えた敦賀の繁盛ぶりを、良く表している作品である。

このような好況を背景に、昭和二年一月の敦賀三業組合は

芸妓数　八十四名
料理業　三十五軒
貸座敷業　四十四軒
置屋

を数えた。また、粟野村金山（現敦賀市桜ヶ丘町）には陸軍の兵営があったことから、将校たちも料理店へ通っていた。

時代も大正から昭和へと移った昭和二年（一九二七）一月二十五日、豊竹土佐太夫が七十四歳をもって帰らざる永の眠りにつかれた。

先に鶴澤寿造師を失い、続いて土佐太夫が亡くなられて、明治・大正時代の敦賀浄曲界を支えた二大師匠を失ったことは、余りにも大きな痛手となった。

すでに久太郎氏の鶴澤時四師は武生町（現越前市）に移られて、敦賀では師匠のいない空白期が続いていくことになった。

時四師も敦賀・武生にと指導に当たっていたが、これにも制約があって二大師匠の存在が大きかった。

さらに軍国思想が高まっていく社会情勢では、芸事を習う環境は厳しく師匠の不在と相まって、敦賀浄曲界も徐々に衰退していった。

このような状況の中で、武生に居を移していた二代目鶴澤時四師の率いる鶴時会主催の春季浄瑠璃大会が昭和三年（一九二八）五月五、六日、開催された。

会場や番付などは不詳であるが、当時の出語りの様子を知ることが出来る。

初日

千代萩　御殿の段

浄瑠璃　勝花家
お染
糸　時四

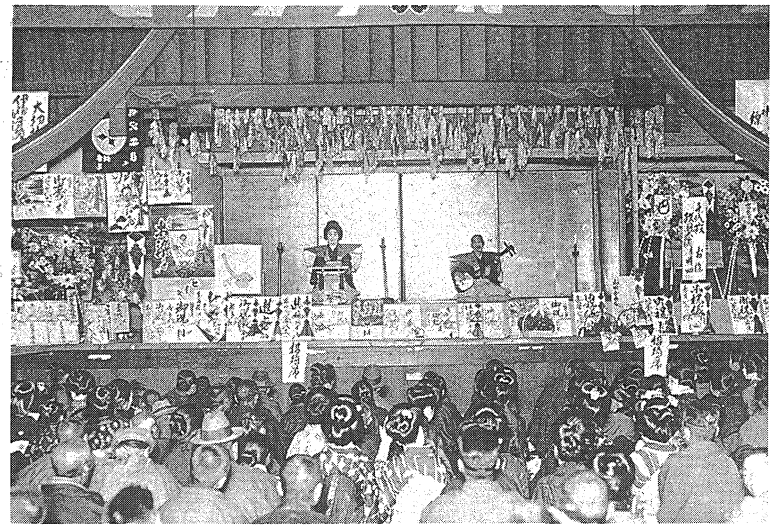
女義（女流義太夫）は肩衣、袴を着装し、舞台を狭しと祝いの品々が飾られて、まだまだ武生には好義連が多かった。

観客は女義の首を振りながら、汗と顔をしかめての熱演に会場は興奮に包まれた。

先の豊竹土佐太夫の訃報に胸のつまる思いが収まらない矢先に、竹西越竹軒の悲しい知らせが届けられた。

敦賀・長浜の両浄曲界に大きな足跡を残された越竹軒は昭和四年三月八日、七十二歳をもって静かに生涯を閉じられた。

厳しい環境の中で敦賀浄曲界は活気を失い消沈していたが、素義の一部が「寿老会」という一小団を結び、昭和七年（一九三二）一



えるようになった。

このような時局を反映して「三勇士名誉肉弾」（肉弾三勇士）が文楽で上演され、この「肉弾三勇士」は素義や芸妓さんの間でも語られて流行した。

また、素義連は昭和七年四月二日、午後一時から敦賀連隊司令部・敦賀衛戍病院（粟野村金山　現桜ヶ丘町、国立病院機構・福井病院）へ戦傷兵士を慰問して、自慢の喉で浄瑠璃を語って慰安した。

素義の三ツ屋町（現栄新町）、西川氏の追善浄瑠璃会が昭和十二年（一九三七）十二月六日、敦賀座で営まれた。

番　組

手向草　初昇
忠臣蔵　二度目　文江
鈴ヶ森　清子
弁慶上使　正語
日吉丸　三ノ切　つた次
三勝半七　三山
太閤記　十　小太郎
本蔵下屋敷　十八
紙治　歌江
逆櫓　うろこ
壺坂　竹馬
百度草（平）　鱗
太閤記　奥　福司
堀川　時四
義作切腹　梅寿

中　入

千代萩　一斗
寺子屋　まこと
朝顔　三原
白木屋　寿巴

大切　演芸大会

この大会では珍しく鶴澤時四師が「堀川」を、坂野梅寿が「義作切腹」と、それぞれ語り、中入りに出演されている太夫は長浜から招かれたのであろう。なお、三味線は誰が勤めていたかは詳らかではない。

昭和七年（一九三二）、松岡洋右全権一行が国際連盟へ出席するために、敦賀から出港した。そして、日独が国際連盟から脱退するという異常事態となった。

月二十三日の午後六時から、角野食堂で新年浄瑠璃大会を開催した。

一方、大陸に目を転じると昭和六年（一九三一）に満州事変、さらに翌年には上海事変が起こり、戦時色が徐々に国民にも影響を与

日本をとりまく国際情勢は厳しさを増し、日本の孤立感が深まっていった。

昭和十五年（一九四〇）、日独伊の三国が軍事同盟を締結した。

そして、昭和十六年（一九四一）十二月八日、日米が開戦し太平洋戦争へと突入した。

国民は徴兵制、学徒動員、食糧配給、灯火管制など、次第に痛みを伴う苦難の暮らしが長く続くことになった。

戦局の激化と共に国内への空襲も激しくなって、ついに昭和二十年（一九四五）七月、敦賀市も空襲によって市内の大半が被災し、多くの人命が失われた。

敦賀市と同様に国内各地も空襲によって甚大な被害を受けて、国民の苦難は止むことはなかった。

そして、昭和二十年八月十五日、日本はポツダム宣言を受け入れて、ここに終戦となった。

混乱した国内状況と、物資や食糧不足によって庶民の生活も苦労が絶えなかった。

空襲によって焼土と化した市内にも、徐々に復興の槌音が聞こえるようになった。

また、戦時中に敦賀湾に投下・敷設された機雷も除去され、昭和二十七年（一九五二）に敦賀港の安全宣言が発せられた。

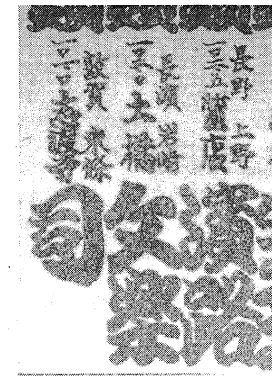
しかし、大陸との貿易も閉ざされて、貨客船の入出港もなく港は衰退した。港と共に賑わった遊郭も空襲で罹災したが、遊郭の灯りが再び点ることはなかった。

毎日が苦しい生活であったが、このような状況でも戦前からの素義連は、浄瑠璃への情熱は失われていなかった。

愛好者が集い、寺院を借りて浄曲会を催した。武生からは鶴澤時四師や、市内からは植山氏、元芸妓さんも参加して浄曲を楽しんだ。いつ頃、どこで開催されたかは明らかでなく、話題として僅かに伝えられている。

戦後の混乱が続き、多くの市民が身心両面で疲労し憔悴していた時に、諸手をあげて喜ぶ快挙の知らせが届けられた。

それは昭和二十二年（一九四七）六月八日から三日間、京都・祇園八阪倶楽部で開催された「第十回　平安素人浄曲会」に、敦賀から出演した東條　司氏が優れた成績で入賞したことである。



東條氏は「花上野誉の石碑」（志度寺の段）を語り入賞を果たしたが、同じく出演していた長浜の岩崎文楽氏も入賞した。岩崎氏は大正十一年二月の「竹西越竹軒一世一代浄瑠璃大会」では、浄瑠璃額の太夫欄に名が記されている。

世の中も少しく安定した昭和二十七年（一九五二）三月、多くの市民や好義連が待ち望んでいた文楽の敦賀公演が実現した。

文楽三和会　敦賀公演

昭和二十七年三月二十八日

会　場　敦賀国際劇場

入場料　前売　百五十円

当日　百八十円

番　組（主な外題）

昼の部

近頃河原の達引　堀川猿廻しの段

本朝廿四孝　十種香より狐火の段

夜の部

絵本太功記　尼ヶ崎の段

壺坂観音霊験記　沢市内より壺坂寺の段

文楽の敦賀公演は珍しく、戦前に浄瑠璃を習い嗜む愛好者も多かったことから大きな反響を呼び、会場は興奮に包まれた。

なお、浄瑠璃の盛んな武生素義連による「春季素人浄瑠璃大会」が昭和二十八年（一九五三）三月、武生・総社大神宮の社務所で開催された。

武生市（現越前市）からは二代目鶴澤時四師の「鶴時会」と、三国町（現坂井市三国町）の「声楽会」との合同義太夫大会であった。当日の番組などは残されていないが、時四師は三国町の素義連にも指導されていたことが窺える。

また、武生市恒例の「たけふ菊人形」が同年十月十日から開催され、十月十六日には滋賀県長浜市から「人形入り義太夫」と、三国芸妓の手踊りが披露された。

戦後の地方で人形浄瑠璃が上演されることは希であり、長浜の太夫・三味線・人形の円熟味のある技芸を、つめかけた多くの観客は堪能した。

戦後も古典芸能を愛好する人々は多く、ラジオの芸能番組では義太夫の他に常磐津、浪曲、富本、新内節などが毎週のように放送された。

昭和二十九年（一九五四）二月十三日、地方局のラジオで小学五年女子の細田さん（福井市）の

恋娘昔八丈　鈴ヶ森の段

が放送された。

父親が習っていた義太夫節を子供さんが興味をもち、本格的に文楽の太夫に師事する例もみられた。

昭和二十九年六月十三日、三国町・声楽会主催の義太夫大会が同町公民館で開催した。出演は

入登、初音、越呉、呂雪、富士、松柳、の各太夫であった。

出演した太夫には戦前・戦後を通して鶴澤寿造、同　時四師に師事された太夫もおり、高齢ながらも熱演して、観客は感銘を受けた。

文楽三和会の第二回・敦賀公演が昭和二十八年四月四日、国際劇場で開催した。出演者は前年度公演と、ほぼ同じだった。

続いて昭和三十三年（一九五八）六月十日、文楽因会の敦賀公演が気比中学校体育館で催された。主な出演者は竹本津太夫、同　土佐太夫、人形の吉田玉男、同　文雀などであった。

文楽も「三和会」と「因会」に分裂していたが統合して、名称を「財団法人・文楽協会」となった。

そして文楽協会として初公演が昭和四十四年（一九六九）六月十二日、敦賀市教育委員会・敦賀青年会議所の共催で市立体育館で開催した。主な外題は

恋女房染分手綱

艶姿女舞衣

摂州合邦辻

などで、江戸時代より語り継がれてきた馴染みのある浄瑠璃であった。

また、敦賀では最終公演となる文楽・敦賀公演が昭和四十九年（一九七四）六月二十三日、市立体育館で昼夜二回の公演が催された。外題は

一谷嫩軍記（いちのたにふたばぐんき）
義経千本桜（よしつねせんぼんざくら）
恋飛脚大和往来（こいびきゃくやまとおうらい）

などが演じられた。

大正から昭和にかけて師匠として活躍された鶴澤時四師（岡村久太郎）は、青年時代の明治から大正・昭和へと移りゆく時代を、浄瑠璃を生涯とした師匠であった。

十代の頃から父親に三味線の修理技術や浄瑠璃を教わり、大阪へも行って修業した。

後には父親の下で芸妓さんの三味線修理を、その傍ら父と一緒に浄瑠璃の愛好者に教えるようになった。父の主宰する「鶴時会」と共に春秋には大会を催し、会員の技芸向上に尽力された。

父と敦賀から武生へ移られた後も、敦賀芸妓さんの三味線の修理や浄瑠璃の師匠として、たびたび敦賀へも訪れていた。

その時四師が昭和三十七年（一九六二）四月三日、青年時代から芸道に入り、浄瑠璃一筋の生涯を終えられた。

時四師は戦前・戦後を通して敦賀浄曲界に大きな足跡を残された、敦賀最後の師匠であった。後に二代目鶴澤時四師の追善浄瑠璃会が、武生・総社大神宮の社務所で営まれた。（年月日未詳）

この浄瑠璃会には弟の鶴澤時二師、松澤綾之助、鶴澤栄糸さん、他には遠く石川県からも出席している。

松澤綾之助さんの義父は著名な竹本酉市師で、福井市をはじめ嶺北地方一円で活躍された師匠で、明治四十一年（一九〇八）三月二十一、二十二の両日、福井市の加賀屋座で一世一代浄瑠璃大会を開催した。

また、鶴澤栄糸さんの父は前述のように、長浜浄曲界の重鎮である鶴澤豊三郎師で、時四師も生前には長浜浄曲界と交流があったことと推察している。

敦賀最後の師匠である鶴澤時四師を失い、加えて昭和四十九年の文楽・敦賀公演が最後となって、わずかに祝日などでテレビで放映される文楽を楽しむ程に、敦賀浄曲界も衰微していった。

戦前からの素義も亡くなられたり、高齢によって浄瑠璃も巷間の話題になることも少なくなった。

このような中で植山鱗太夫が昭和五十一年（一九七六）五月二十九日、家族をはじめ多くの人々から深い惜別の情を受けながら、九十三年の輝かしい生涯を閉じられた。

敦賀浄曲界最後の太夫であった鱗太夫を失ったことで、上方や江戸で活躍した太夫・三味線・人形遣いを輩出して、長い歴史と隆盛を誇った敦賀浄曲界は終焉をむかえ、ここに静かに幕が下ろされた。

劇場・人物・文楽公演

笹屋座

笹屋座は江戸時代から港町・敦賀に在って、唯一の芝居小屋であった。町民をはじめ、行き交う旅人、商人、船乗りなど、多くの人々が楽しみ親しまれた、馴染みの深い芝居小屋であった。

しかし、これまでには様々な困難を乗り越えてきたが、幕末の文久三年（一八六三）に

は長い年月を経て建物も老朽し、加えて安政元年（一八五四）の地震によって建物が東の方へ傾き、危険なことから建て替えの必要に迫られた。

このため笹屋家では役所、町方に頼み、敦賀三十六町の肝煎や各家に通札の買い求めを依頼した。

町方の協力によって集められた資金で、無事に建て替えすることが出来た。

（「芝居舞台小屋立替ニ付笹屋治郎兵衛願書」（山本計一文書）『敦賀市史』史料編 第二巻）

この時の建物が、大正時代に建て替えされるまで存続した。

遡って笹屋座となった経緯は

座元吉郎右衛門舞台桟敷共享保十一年春雪ニ而潰シ、取立候義不成候ニ付、同年春6笹屋次郎兵衛新芝居取立座本勤ル、

（「指掌録」『敦賀市史』史料編 第五巻）

このように享保十一年（一七二六）の大雪で舞台桟敷が潰れたが、座元の吉郎右衛門には修復する資力がなかった。

小林　明治・大正・昭和　敦賀浄曲界

代わって笹屋次郎兵衛がこれを修復して、再興することが出来た。以来、笹屋家が座元となって経営して、この時の建物が大正時代に建て替えられるまで存続した。

そして芝居小屋名も、いつしか笹屋の屋号から「笹屋座」と称されるようになった。

経営を譲渡した吉郎右衛門と笹屋次郎兵衛との関係であるが、氣比宮勧化之帳に両者の名が見えている。

この頃の吉郎右衛門は新町に住し、笹屋家は丁持町（新町・丁持町　現栄新町）にあって、隣町内ほどに近いことから面識のある間柄ではなかったか、と推察されるが詳らかでない。

また、全国版として刊行されている浄瑠璃・歌舞伎の芝居小屋の番付けでは

「諸国芝居繁栄数望」　文政八年刊

東方　前頭／越前　三国
前頭／越前　福井
前頭／越前　敦賀

（『義太夫年表　近世篇』）

越前の芝居小屋は右のように格付けされている。

芝居小屋の座元となった笹谷家の墓碑が、今も市内に残されている。

松島町　来迎寺野

（正面）
祐清
浄閑
釋
成圓
轉夢
（左面）
丁持町
笹屋次良兵衛
（右面）
安永四歳次乙未十一月朔日
築之

	宝永４年	享保17年	天明７年	江戸時代（年代不詳）
（新　町）吉郎右衛門	吉郎右衛門	吉郎右衛門		
（丁持町）笹　屋	治郎兵衛	治郎兵衛	笹屋治郎兵衛	笹屋さく

（「氣比宮勧化之帳」「大神宮奉加帳」敦賀市立博物館 蔵）

（正面）　　（正面台石）
明治三十九年　　笹
釋　存立　　治屋
一月十三日　　良
清屋常祢信女　　兵
（右面）　　衛

明治三十九年十一月

同家の過去帳には

安永四乙未年十一月一日　浄閑　笹谷治良兵衛
寛政元年八月　　轉夢　笹谷治良兵衛
享和元年八月三十日　了受　笹谷次良兵衛
天保十一年六月二十六日浄心　笹谷治良兵衛

と記帳されている。この両墓の後方にも墓石があり、これも笹谷家の墓碑と推察されるが、風化によって読み取り不可能となっている。

明治政府の戸籍法に伴い名字も「笹屋」から「笹谷」へと改姓されて、この後は座名も「笹谷座」と称するようになった。

笹谷家の代々は芝居小屋の経営を続けて来たが、大正九年（一九二〇）に経営権を譲渡して、この時に建物も新築されて座名も「敦賀座」と改名した。

新築された敦賀座は純日本式で建設費も約四万円を要し、二月八日に「こけら落とし」が挙行された。

そして翌年には経営も法人化されたが、この建物が昭和二十年七月の敦賀空襲によって焼失するまで存続した。

しかし、被災後は再建されることはなく、敦賀座の名称も消滅した。

人物

植山常太郎

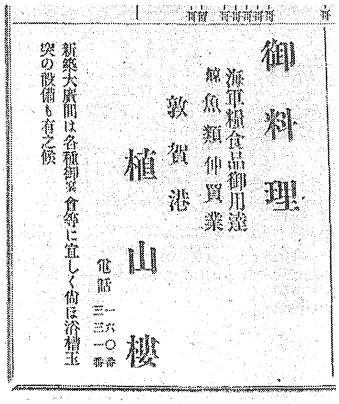
植山氏は少年の頃から芸事が好きだったようで、十二、三歳の頃から芝居に興味を持ちはじめて、二十歳頃から本格的に浄瑠璃を習うようになった。

芸名を鱗太夫と称して、笹谷座の舞台や例会では浄瑠璃を披露した。とくに鱗太夫は浄瑠璃の十八番の一つに「薫梅忠義魁」がある。

これは明治三十七年（一九〇四）の日露開戦の時に旅順港の閉塞作戦に従事し、殉難された梅原健三海軍水兵の功績を題材にしたもので、「梅原留守の段」がある。

この浄瑠璃は素義や芸妓さんの間でも流行して、鱗太夫も大会があるといつも「梅原内」を語ることが多かった。

同氏はまた実業家としても知られて、旧笹の川河畔に植山別荘や植山楼を経営した。（別荘は昭和二十三年六月、㈱観光ホテルに譲渡）



（浦潮日報　大正７年２月15日）

氏は風流を好む粋人としても知られ、戦前には笙の川に納涼船を浮かべたり、芸妓さんを引き連れて遊郭内を闊歩する豪胆さも持っていた。

戦後は逸早く文楽の敦賀公演の招請に尽力されて、昭和二十七年には戦後第一回となる公演が実現した。

昭和四十四年に敦賀港の開港七十周年を祝う記念式典が、市立体育館で挙行された。

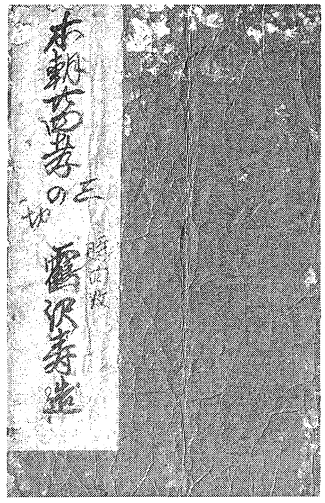
この式典で氏は港湾振興の功労者として表彰され、経済界に在っては商工会議所議員、敦賀町議、市議を務めた。

また、敦賀港工事の予算獲得にも努力され、敦賀商工会議所・交通部長として、名敦国道の新設、福井・敦賀間の国道改修にも力を注ぎ、郷土発展に大きく寄与された。

植山氏は敦賀の経済界や芸界に大きな足跡を残されて、昭和五十一年五月二十九日、九十三歳を一期にして生涯を閉じられた。

（墓所）　結城町　真願寺

樹心院釋宗道



岡村利七・久太郎

鶴澤寿造の利七氏、鶴澤時四の久太郎氏の

小林　明治・大正・昭和　敦賀浄曲界

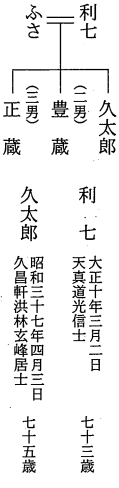
岡村家は森屋敷町（境区　現栄新町）で三味線店を営み、芸妓さんなどの三味線修理・販売を行っていた。

父の利七氏は昼は芸妓さんに三味線を、夜は浄瑠璃を愛好者に教えていた。

子息の久太郎氏は少年の頃から浄瑠璃や三味線も習うようになったが、父から浄瑠璃の師匠では生活は難しいと言われ、十四歳のとき三味線の修理技術などの全般を修業するために大阪へと赴いた。

帰郷後は更に父の下で技芸修練に努めて、後には広く和楽器店を経営するようになり、その傍ら三味線や浄瑠璃を教えるようになった。

利七氏は京都の出であり、久太郎氏は利七・ふさ夫妻の長男として生を受けた。



久太郎氏は十代になった頃から父の影響で芸の道へ入ったことと推察され、十四歳のとき修業のために大阪へと旅立っている。

利七氏の浄瑠璃の師系であるが、京都出身である鶴澤時蔵（時造）が天保中頃に三味線から浄瑠璃を語る太夫へと変わって、五代目豊竹時太夫と改めた。

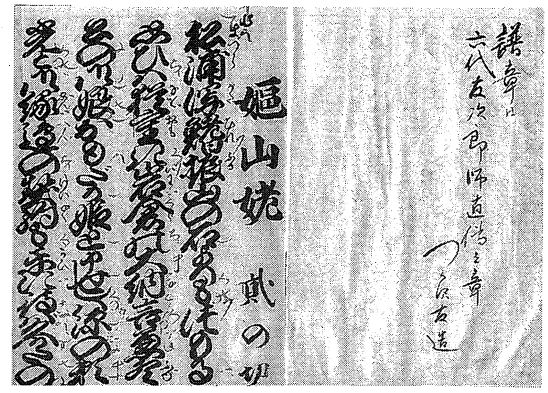
さらに、幕末から明治にかけて大阪の舞台で活躍された六代目豊竹時太夫がいる。元は三味線奏者で、豊澤廣助門人となって豊澤竹松、鶴澤文駄を名乗った。後に浄瑠璃語りの太夫となって六代目豊竹時太夫を襲名した。

この六代目時太夫の子息が田村源太郎氏で明治二十五年十月、彦根生まれ。明治三十六年五月、鶴澤猿系（六代鶴澤友治郎）入門、明治四十五年二月、鶴澤友造と改めた。

（『義太夫年表　大正篇』『音曲双書』）

父の利七氏は六代目豊竹時太夫に師事されたのでは、と推察されるが未詳である。

利七氏の師匠が六代目時太夫であるとすれば、時太夫の子息鶴澤友造（田村源太郎）と鶴澤時四（岡村久太郎）は同じ年代であり、また、父の師系の関係から両者の交流もあったことと察せられるが、今日では確認はされていない。



（墓所）　松栄町　洲江院

天真道光信士　大正十年三月二日　岡村利七
久昌軒洪林玄峰居士　昭和三十七年四月三日　岡村久太郎

坂野梅吉

梅寿さんの坂野氏は左官業を営み、名前の梅吉さんから「梅ちゃん」の愛称で多くの人々から親しまれていた。

石綿製烟筒ノ元祖　代理店
金剛烟筒特約販売　坂野梅吉
エスアイ商会大販売部　郡役所前

（昭和二年一月一日　敦賀新聞）

梅寿さんは敦賀へ興行にきていた女流義太夫の「奈良駒」さんと知り合い、縁あって世帯をもち曙町・県立常盤病院近くに家を借りて住んでいた。

奈良駒さんは以前どこに住み、どの座に所属していたかは明らかでなく

神戸　旭亭　奈良駒

（『明治大正女義太夫盛観物語』）

とあるが、この女義が梅寿さんと結婚された奈良駒さんであるかは定かでない。

また、奈良駒さんは後に、敦賀芸妓さんに三味線を教えていたようだ。

大正十二年の関東大震災のとき敦賀町では義捐金を募っているが、その中に

津内区ノ内　坂野梅吉

と坂野氏の名も見えている。

梅寿さんは竹西越竹軒の一世一代浄瑠璃大会には豊竹土佐太夫、鶴澤時四、同　時二と共に出演して、浄瑠璃大会には必ず梅寿さんの名が見えている。

しかし、後年の梅寿・奈良駒夫妻の消息は得られていない。

竹西常治郎

竹本越竹軒こと竹西常治郎氏は鶴澤寿造、豊竹土佐太夫と並び称される師匠である。滋賀県長浜市の出身で、いつの頃からか敦賀旭町（現相生町）で綿屋を営むようになった。

長浜市は江戸時代から長浜曳山祭りで子供歌舞伎が上演されることから、浄瑠璃が特に盛んで、これが芸道に入る動機になったことと思われるが詳らかでない。

浄曲に入門された頃の師匠や初名などは明らかでないが、後には鶴澤豊三郎師に師事された。

越竹軒の初見は明治三十三年四月の大会で、鶴澤時四（時蔵、寿造）の糸で語っている。大会の番組や会場は不詳であるが、料亭または民家の大広間を借りて開催したのであろう。

敦賀では鶴澤寿造、豊竹土佐太夫らと行動を共にして、浄曲会では人形身振りを披露す

る一面もあった。

越竹軒は信仰の篤い人で

曙　町　氣比神宮

当港

「正綿商　竹西常二郎

金ヶ崎町　金崎宮

敦賀港旭

綿商　竹西常治郎

両宮に、それぞれ石玉垣を献納されている。

越竹軒は晩年には長浜へ戻られて多くの門人を擁し、後進の育成に努められ、浄曲界発展の功績を称える碑が建てられた。

長浜市北船町　浄国寺

（碑表）

越竹軒之碑

正五位勲五等　藤田正邦　書

（碑背）

大正十四年九月

発起　本義会

双葉会

しかし昭和四年三月八日、惜しまれつつ七十二歳の天寿を全うされた。

過去帳に

越竹軒常誉正寿居士　竹西徳治郎

昭和四年三月八日　父　七十二歳

と記帳されている。

竹西常治郎氏の子息である徳治郎氏は境区（現栄新町）に寄席を建設して、安来節、浪花節、万歳、落語や芸妓さんの温習会など、多くの演芸が上演された。

席名も翁館から新竹座、楽席へと変わり、映画常設の大衆館となって昭和二十年の空襲で焼失した。

また、楽席の頃に下座音楽を受け持っていたのが染八師匠であった。

染八さんには多くの方々が芸事を習いに通っていたが、中には柴田、橋本、中川、植山、平口の名士も見られ、中川瓢太夫、植山鱗太夫、平口寿太夫の芸名はよく知られている。

染八さんは四国の出身といわれ、ひと頃は京都・三本木町にも勤めていた。敦賀では永賞寺（境区　現栄新町）の近くに住んでいたが、昭和二十年七月の空襲では高齢のため犠牲になられた。

和田孫左衛門

豊竹土佐太夫の和田孫左衛門さんは安政元年（一八五四）八月四日、一向堂町（晴明町現相生町）で桶屋を業としていた孫左衛門・ぎん夫妻の長男として生まれた。

幼名は明らかではなく成人した明治三年（一八七〇）二月、家督を相続したが、和田家代々の当主は孫左衛門を名乗り、このときに孫左衛門の名跡を受け継いだのであろう。

和田家は江戸時代から桶屋を業としているが、氣比宮の勧化帳などに孫左衛門さんの名

も記帳されている。

とくに享保十七年（一七三二）の一向堂町では桶屋業として十三軒が記帳されて、桶屋に携わる家業が多かった。

当時の孫左衛門家は丁稚や借家等も数軒を持ち、桶屋業が繁盛していた。

同家の過去帳によれば

青山浄春居士　桶屋孫助

延宝五年十一月九日　桶屋孫左衛門

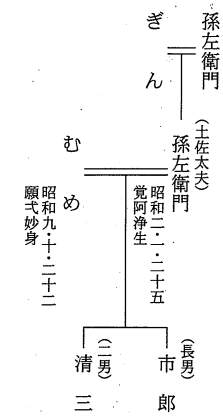
とあるから、古くからの桶屋業であった。

土佐太夫の孫左衛門さんは少年の頃から家業を手伝っていたことと思われるが、何歳頃から浄曲の道へ入られ、初名や師匠名などは明らかではない。

しかし、後には豊竹土佐太夫を名乗っていたことは、師匠の名を襲名したのであろうと考えられる。孫左衛門

	享保17年	宝暦４年	天明７年	文化11年
（一向堂町）桶屋孫左衛門	肝煎 孫左衛門	孫左衛門	孫左衛門	桶屋 孫左衛門

（「氣比宮勧化之帳・同　奉加帳」敦賀市立博物館　蔵
「一向堂町若者不届二付済口証文」
（山本計一文書）『敦賀市史』史料編　第二巻）



さんの芸名である豊竹土佐太夫の名は、敦賀とは縁が深く

元町　妙顕寺

（正面）

自妙院音達日浄霊

（左面）

豊竹土佐太夫塚

の墓碑がある。過去帳によれば

自妙院音達日浄

天明八年三月二十二日

生竹屋十兵衛

と記されて、これは敦賀浄曲界の草創というべき太夫である。生竹屋については

天明七年　幾竹屋

江戸時代　生竹屋重右衛門

（年代不詳）

（『大神宮奉加帳』　敦賀市立博物館　蔵）

と記されている。生竹屋の過去帳には

享保十七年七月十四日

釋　了智　生竹屋十兵衛

とあり、これは生竹屋の始祖ともいうべき人であろう。奉加帳に記帳されている重右衛門さんは

若狭町末野　恵比須神社

奉　献　敦賀講中

伊藤市左衛門

世話人　丸屋久兵衛

生竹屋重右衛門

寛政十年正月二十日

と石灯籠を奉納している。重右衛門さんは過去帳に

春山宗悟信士

文化七年正月二十六日

生竹屋重右衛門

とある。

(一)
豊竹土佐太夫（丁持町生竹屋十兵衛　天明八・三・二十二　没）
同　土佐太夫（丁持町　土佐太夫）
（『文政三年敦賀雑記』「文政八年人形笠井　文十郎墓石建立世話人銘」『若越郷土研究39-6』）

(二)
三代目
豊竹麓太夫（五代目　八重太夫）
六代目
豊竹八重太夫（八百太夫）
二代目
豊竹土佐太夫（越前敦賀住人）
（『音曲双書』『増補浄瑠璃大系図』『人形浄瑠璃系譜（太夫の部）』）
豊竹常盤太夫（慶応年中改メ　七代目　八重太夫）
常盤太夫（越前敦賀住人）
（「三都太夫三味線操見競鑑」『義太夫年表　近世篇』）

(三)
（大阪）四代目
竹本土佐太夫
（名古屋）
豊竹土佐太夫（慶応四年頃改メ　豊竹姓）
（『名古屋市史（風俗篇）』「明治四十四年　三府浄瑠理三味線人形座敷角力」）

(四)
豊竹土佐太夫（安政四年　磯太夫改メ）
同　土佐太夫（慶応元年　い太夫改メ）

なお、小浜藩主が文化二年（一八〇五）八月に敦賀氣比祭りの見物に訪れて、この時には芸妓、浄瑠璃、地方を合わせて百十二人という敦賀芸妓総出で歓迎して、この芸妓さんの中に「生竹屋つう」の名が見えている。

孫左衛門さんの師匠については全く手掛かりがなく、管見では別図の四師系が考えられる。しかし、どの師系と繋がりがあるかは未詳であり、孫左衛門さんの誕生年から図の(二)(三)(四)が現実的である。

ただ麓門下の二代目豊竹土佐太夫が生竹屋の家系と繋がりのある太夫だとすれば、両者の年代と同郷であることから孫左衛門さんの師匠として有力となろう。

孫左衛門さんの土佐太夫師には素義や芸妓さん、それに敦賀港工事に携わっていた職員も夜には習いにきて、稽古台に向き合い厚手の紙を括って拍子をとりながら教えていた。

土佐太夫師は招かれて指導に行くと彼の地に一ヵ月近くも滞在して、浄瑠璃への芸魂には厳しさがあった。

大正の中頃には鶴髪も増して昭和二年一月二十五日、明治・大正という激動の時代を浄曲一筋の偉大な生涯を終えられた。享年七十四、覚阿浄生居士、松島町　来迎寺。

この年の冬は例年にない積雪で、葬儀も難渋した。

先に鶴澤寿造を、さらに豊竹土佐太夫の二大師匠を失ったことで、この後の敦賀浄曲界は徐々に衰退していった。

おわりに

天然の良港を背景にして繁栄した敦賀は、古くから多くの書物などによって、その賑わいぶりが紹介されている。

遊里の華やかさや賑わいが紹介されていた陰では、暴力沙汰や心中事件などの痛ましい出来事も起きていた。

港の繁栄と共に花柳界も賑わって、お茶屋で遊びながらも社会情勢や経済などの情報を得たり、商談や社交の場としても利用された。

そして会社幹部や商店主など、いわゆる旦那衆は粋で郭の通でもあり、芸妓さんから芸

人形浄瑠璃文楽（戦後）福井県公演記録

公演年月日	主催	公演地	会場	主なる外題	主なる出演者	所属	備考
昭和23年12月9日		三国町	港座	仮名手本忠臣蔵 壺坂霊験記	竹本大隅太夫　吉田文五郎	因会	因会結成後福井県初公演か？
26年3月16日	福井新聞社	福井市	国際劇場	菅原傳授手習鑑 伊達娘恋之緋鹿子	竹本伊達太夫　桐竹紋十郎	三和会	福井市第一回公演
27年3月27日	右同じ	福井市	国際劇場	近頃河原達引 義士忠臣蔵	右同じ	右同じ	福井市第二回公演
27年3月28日	右同じ	敦賀市	国際劇場	右同じ	右同じ	右同じ	敦賀市第一回公演
27年3月29日	右同じ	小浜市	公会堂	右同じ	右同じ	右同じ	小浜市第一回公演
28年4月4日	右同じ	敦賀市	国際劇場	御所桜堀川夜討 三十三間堂棟由来	竹本伊達太夫　桐竹紋十郎	三和会	敦賀市第二回公演
28年4月5日	右同じ	福井市	国際劇場	右同じ	右同じ	右同じ	福井市第三回公演
29年11月24日	右同じ	福井市	公会堂	傾城阿波鳴門 新曲釣女	豊竹若太夫 桐竹紋十郎　野沢喜左衛門	三和会	福井市第四回公演（豊太夫）若太夫十代目襲名披露
31年4月24日	県文化協議会	福井市	公会堂	義経千本桜 奥州安達原	吉田文五郎（人間国宝）他出演	因会	福井市第五回公演
33年6月10日	敦賀市教育委員会	敦賀市	気比中学校体育館	音冴春臼月 絵本太功記	竹本土佐太夫　鶴沢藤蔵	右同じ	敦賀市第三回公演
34年6月16日	福井新聞社	福井市	国際劇場	壺坂観音霊験記 摂州合邦辻	竹本津太夫　吉田玉五郎	因会	福井市第六回公演
39年9月2日	県邦楽連盟 NHK福井放送局	福井市	公会堂	天網島時雨炬燵 生写朝顔日記	竹本津太夫　桐竹紋十郎	文楽協会	福井市第七回公演 文楽協会38年発足後初公演
40年9月3日	右同じ	福井市	商工会館ホール	近頃河原達引 恋女房染分手綱		右同じ	福井市第八回公演
42年9月7日	福井新聞社	福井市	商工会館5F大ホール	傾城反魂香 傾城阿波鳴門	竹本隅太夫　桐竹紋十郎	右同じ	福井市第九回公演
44年6月12日	敦賀市教委 敦賀青年会議所	敦賀市	市立体育館	恋女房染分手綱 義経千本桜	竹本相子太夫　武沢団六 桐竹紋十郎	右同じ	敦賀市第四回公演
49年6月23日	右同じ	敦賀市	市立体育館	伊賀越道中双六 一谷嫩軍記	竹本伊達路太夫 野沢吉兵衛　桐竹勘十郎	右同じ	敦賀市第五回公演

（以下略）

を習い一芸に秀でる客も多く芸妓さんと共に、お茶屋文化を支えた。

やがて戦局の激化に伴って昭和二十年七月の敦賀空襲によって市内は焦土と化し、続いて終戦、さらに大陸間貿易の衰退と相まって、戦前からの贔屓筋である旦那衆も没落した。

昭和二十六年には芸妓さんも七、八名と減少し、厳しい環境の中でも名古屋から清元節の師匠を招請したり、芸妓養成を目的とした常盤学園も設立した。

しかし、お座敷に呼ばれることも少なくなり、加えて芸妓さんも高齢化で廃業したり、料理店、旅館を営むなどの転業を余儀なくされた。

戦前からの素義連も活躍する場もなく、新たに習うにも師匠が不在で、敦賀浄曲界は衰退の一途を辿った。

先述の豊竹土佐太夫を初めとして

江戸　本所中之郷　豊竹敦賀太夫

（宝暦五年刊　『豊曲不二谺』）

松島町　来迎寺野　豊竹敦賀太夫

（文化十年十二月）

の太夫名も残されている。

江戸時代から庶民の芸能の一つとして栄えてきた浄瑠璃も、戦後の思想の変化、映像や娯楽の多様化、情報通信などの発展によって、敦賀浄曲界や華々しく賑わっていたお茶屋文化も、今は過ぎ去った昔ばなしの露と消えてしまった。

今日では氣比神宮・絵馬堂に残る豊竹土佐太夫の浄瑠璃額と、金ヶ崎町・金崎宮の玉垣に貿易会社や、お茶屋の名が見られて、わずかに往時の繁栄を偲ぶ唯一の証しとなっている。

末尾ではございますが資料のご提供を頂きました岡村、和田の御両家、そして、訪れた先々で多くの方々には大層お世話になりました。

ここに皆様方のご協力に厚く御礼を申し上げます。

参考文献

浦潮日報、越前産業新報、大阪朝日新聞、武生中外新聞、敦賀新聞、福井新聞、北陸実業タイムス、歌舞伎年表、義太夫年表（近世・明治・大正篇）、敦賀市史（史料篇）、長浜市史。

小林　明治・大正・昭和　敦賀浄曲界